

自選五十首



渡辺松男

八月をふつふつと**蠱毒**のフリードリヒ・ニーチエひげ濃かりけり

〔寒気氾濫〕

筋肉の時代が消えたわけでなくジャッキを上げる弟の腕

そうだそのように怒りて上げてみよ見てみたかつた象の足裏

一本の樹が瞑想を開始して倒さるるまで立ちておりたり

約束のごとく葉を落とし終え樹は重心を地下に還せり

橋として身をなげだしているものへ秋分の日の雲の影過ぐ

背を丸め茂吉いずこを行くならん**乳房雲**はくろくるとくる

キャベツのなかはどこへ行きてもキャベツにて人生のようにくらくらとする

つくづくとメタフィジカルな寒卵**閻浮提**容れ卓上に澄む

平原にぼつんぼつんとあることの泣きたいような男の乳首

一のわれ欲情しつづ山を行く百のわれ千のわれを従え

磁石をくつつけたり、引き離したりすると

きの感触が好きだった。指先にかかる強い抵抗感がなんとも言えなく好きだった。そのうち私は磁石そのものになって、目立たないところにひっそりとくつついていたくなった。冷蔵庫や電子レンジあるいは換気扇の隅がよかった。交通標識などもよいと思った。ばかげた妄想と言えばそれまでののだが、けっこう本気なのであった。

やがて道路を歩いていてトラックやダンブカーが走って来たりすると危なくなつた。飛び込みたくなるのである。小さな磁石の私は飛び込む。そしてボディの側面かどこかにひよいとくつつくのである。ふつうの乗用車ではいけない。スマートなのは特にいけない。埃っぽい重量感がなくてはだめ

神は在りてもなくても秋の大げやき宙宇に赤ききのこを張れり
地に立てる吹き出物なりにんげんはヒメベニテングタケのむくむく
月読に途方もなき距離照らされて確かめにいくガスの元栓
樹は内に一千年後の樹を感じくすぐつたくてならない春ぞ

暴風雨に錯乱をする竹の叢 一遍らかく踊りしならん

抜けし歯のごとく炎天に投げ出されわがうつそみは歩きだしたり

概念を重たく被り耐えているコンイロイッホンシメジがんばれ

ああ母はとつぜん消えてゆきたれど一生なんて青虫にもある

釣り合えよ 今日死ぬ鳥のきょうの日と千年生きる木の千年と

ごうまんなにんげんどもは小さくなれ谷川岳をゆくごはんつぶ

にんげんの時間は背骨のなかにある樞を見上げてわれ息深し

やすらぎのなきことを地に庇いあい鳥はひろげる大雨覆おおもまおひ

木は開き木のなかの蝶見するなりつぎつぎと木がひらく木の胸

吾亦紅われもこうじくつじくつと空間を焦がしていたり 戦争ははだか

水を出しておおきな黒き水掻きのべつたんべつたん白鳥がくる

夢にわれ妊娠をしてパンなればふつくらとしたパンの子を産む

おばあちゃんお寺なんてみな嘘ですネミトコンドリア・イブのおばあちゃん

へぼくを糸で草木につなぎとめておく風のある日は気持ちよいから

どつぶんどつぶん自動車流るおとことしてのみ込めぬものばかり流るる

生を鈍き音たてながら行く父よごんずいごんずいごんずいの花

『泡宇宙の蛙』

なのだ。一度くつついてしまえば後は安心
である。風は圧倒的な力で襲いかかってくるが、私は落ちることがない。その杜快感
はいったい何に譬えればよいのだろう。見
る見る景色が変わる。視界はきらきらと眩
しくなって振動を帯びながら支配的な一色
に染まる。たとえば黄色。ああ「いちめん
のなはなちめんなのなはなちめん
…」。どこかで聞いたような詩の光景がスー
パーリアリスティックに展開する。

走りによって疲れると適当のところから
磁力を解き、路上に落ちて一休みする。
見えるのは青空ばかり。「空の青さをみつめ
ていると私に帰るところがありそうな気が
する」とかなんとか今度は俊太郎の詩をく
ちずさみながら次のトラックを待ち、また
ひよいとくつついて、そんなことをしなが
ら何処までも旅を続けるのである。

このような話を人にしたら、ただ笑われ
ただけなのであるが、考えてみれば生きて
いることそのことが地球にしっかりとくつ
ついているようなものである。私が地
球から引き離される時ほんとうの旅がは
じまるのだ。今はただ青空とときどき流れ
去る雲しか見えなくて、その向こう側を知
らない。

(わたなべ・まつお「かりん」)

むつすむつすとこんにやくだまは地に太り　そよ近代のあらざりし国
戦後深く湿りたる地にのめりつつおつすおつすと老桜くる

青木伊平というひとありしゆく川のほのぐらさなど水引の花
いとこ死にまたいとこ死に真夜中の廊下廊下に齒をみがく音

一のわれ死ぬとき万のわれが死に大むかしからああうろこ雲

エルニーニョのりもの酔いの語感あり神のゆめみるはるかなる沖

オーロラにあこがれながら人体はけむりなりけりうらしまたろう
宇宙ひもループをつくる塵劫じんこうを一億の吾が遊行してゆく

犬にねぶらるる骨は気持ちがよさそうと病気の母が言えり　おそろし
死後の母も母なれば苦しがるらんやくらくらと木に人の耳でる

母を一疋二疋とかぞえやるせなしこの山毛櫨の蟬かの櫛の蟬

憂鬱なるわれは櫂の巨人となり来るクルマ来るクルマひつくりかえす

人生をまるかじりするざくつざくつ　キャベツが少しずつ欠けてゆく

肝をかき猛烈に眠る父のあり寄せてくる壁遠ざかる壁

笑え笑えおたまじゃくしの小さな齒　世界はたぶん齒より小さい

恋猫の疾走をしてゆきたるは世をぬけいでしごとく風吹く

くしゃみをすればまつしぐらに飛びてゆくものあり　一休禪師はいま月の裏

きつねつきその瞳まのなかにわれもいるいちめんに芽花ゆれてまぶしく

ぶらんこをゆつくりこげば牡丹ひらきせわしくこげば草花むすう

「泡宇宙の蛙」以後